

体育の教員で剣道が専門であられる塚本邦重先生が、学生指導を全てやって頂いていることにすっかり甘えてしまい、職務を何一つ果たさなかった。その事を一言も私に求めようともされなかった塚本先生のご配慮と恩情に感謝してもし尽くせない。もし塚本先生であられなかったら、私のような人間ならば、研究の情熱は多忙に甘えてとうの昔に、そがれていた事は自明である。この場を借りて改めて塚本邦重先生に感謝申し上げる。

限られた時間の中で、まず私が取りくんだことは、大学院時代から興味を持ち続けていたもので、金子彦二郎氏が、先鞭をつけられた道真の漢詩と白居易の漢詩の比較考察に視点を移し、その用例の収集を始めることだった。それを進めていくうちに道真の漢詩集『菅家文章』から、太宰府時代の『菅家後集』にも及び、この集に収められている作品群が、それまでの道真の漢詩の詩風と大きく異つていることに俄然、興味がわいて来た。と同時に、大作といわれる「敍意一百韻」等の注釈がほとんど存在しないことに気付いた。この注釈作業こそ自分が、腰を落ちつけて取り組める研究対象ではないかと、一人合点した。と同時に、川口久雄氏の校注作業がどれほど大変なものであったか、又、どれほど優れた業績であったか、自分自身がこの作業に本格的に対峙するようになって初めてわかって来た。こうした折、金沢学院大学の柳澤良一先生による『菅家後集』の詳細な注釈が公にされたことを知った。この柳澤先生の緻密な考証に裏付けられた論文を拝読しながら、これと同じ土俵でやるだけの力量が自分自身にあるとは到底思われず挫折感を味わっていた時、故今井源衛先生から「注釈は一つとは限らない。十人いれば十人の注釈の仕方がある。あなたのやり方で注釈を公にするのは無駄ではない」といった趣旨の手紙を頂いた。この一文が私の大きな救いとなった。柳澤先生の学恩に預かりながらも、自分なりの、やれるだけの注釈を試みようとして、その時覚悟が出来た。

拙文を公にすることに厚かましさも顧みず和漢比較文学会の会員の先生方に抜刷を送り続けた。学会での口答